

詩篇 88 篇

0 歌。コラの子たちの賛歌。指揮者のため。マハラテ・レアノテの調べに合わせて。エズラフ人ヘマンの
マスキール

《救いの神への訴え》

- 1 【主】、私の救いの神。私は、昼は叫び、夜はあなたの御前にいます。
- 2 私の祈りがあなたの御前に届きますように。どうか、あなたの耳を私の叫びに傾けてください。

《死と背中合わせの現状》

- 3 私のたましいは、悩みに満ち、私のいのちは、よみに触れていますから。
- 4 私は穴に下る者とともに数えられ、力のない者のようになっています。
- 5 死人の中でも見放され、墓の中に横たわる殺された者のようになっています。あなたは彼らをもはや覚えてはられません。彼らはあなたの御手から断ち切られています。
- 6 あなたは私を最も深い穴に置いておられます。そこは暗い所、深い淵です。
- 7 あなたの激しい憤りが私の上にとどまり、あなたのすべての波であなたは私を悩ましておられます。セラ
- 8 あなたは私の親友を私から遠ざけ、私を彼らの忌みきらう者とされました。私は閉じ込められて、出て行くことができません。
- 9 私の目は悩みによって衰えています。【主】よ。私は日ごとにあなたを呼び求めています。あなたに向かって私の両手を差し伸ばしています。
- 10 あなたは死人のために奇しいわざを行われるでしょうか。亡霊が起き上がって、あなたをほめたたえるでしょうか。セラ
- 11 あなたの恵みが墓の中で宣べられましょうか、あなたの真実が滅びの中で。
- 12 あなたの奇しいわざが、やみの中で知られるでしょうか、あなたの義が忘却の地で。

《終わりなき訴え》

- 13 しかし、【主】よ。この私は、あなたに叫んでいます。朝明けに、私の祈りはあなたのところに届きます。
- 14 【主】よ。なぜ、私のたましいを拒み、私に御顔を隠されるのですか。
- 15 私は若いころから悩み、そして死にひんしています。私はあなたの恐ろしさに耐えてきて、心が乱れています。
- 16 あなたの燃える怒りが私の上を越え、あなたからの恐怖が私を滅ぼし尽くしました。
- 17 これらが日夜、大水のように私を囲み、私を全く取り巻いてしまいました。
- 18 あなたは私から愛する者や友を遠ざけてしまわれました。私の知人たちは暗い所にいます。

本篇は、すべての詩篇の中でも最も暗い詩と呼ばれています。神への訴えに始まり、詩人のあまりに苦しい現状が述べられ、最後まで日の目を見ぬままに終わってしまうのです。解決の糸口なく締めくくられる人生……？本篇の内容はヨブ記とも類似しており、彼の人生に照らして読むと理解が深まるかもしれません。とはいえ、ヨブの人生とも異なる点があり、この詩人は若い頃から苦しみ続けてきたようで（15 節）、終わりの見えない病によって悩まされ続けているようなのです。しかも、ヨブ記のようにハッピーエンドで終わってもいません。「上には上がいる」のであれば、「(悩みにおいて) 下には下がいる」と言えましょうか。そのような詩人の叫びからどうにか福音を聞き取ることができればと願います。

84 篇から続いてきた「**コラの子たちの賛歌**」のまとめりとしては、本篇が最後になります。「**マハラテ・レアノテ**」というのは、そのような名前の旋律が存在し、それに合わせて本篇を歌うようにとの指示だと思われます。悲しい短調のメロディが想像されるところです。「**エズラフ人ヘマン**」が I 歴代 6:33, 37 に登場するコラの子ヘマンだとすると、彼は幕屋（神殿）に仕えて礼拝を指導する立場にあったことになります。

1～2 節で、詩人は「**私の救いの神**」と呼びかけています。この二つの節の中で繰り返し「**叫ぶ**」という言葉が使われているところから¹、彼が来る日も来る日も神に⁰ ^{あつ}鳴咽を漏らしていたことが窺えます。「いつまでこの苦しみは続くのですか」と。

3～12 節をひとまとめに見たとき、「死」と関連する表現のオンパレードであることが分かります。「**よみ**」（3 節）、「**穴に下る**」（4 節）、「**死人の中**」「**墓の中**」「**殺された者**」（5 節）、「**最も深い穴**」「**暗い所**」「**深い淵**」（6 節）、「**死人**」「**亡霊**」（10 節）、「**墓の中**」「**滅びの中**」（11 節）、「**やみの中**」「**忘却の地**」。旧約においてよく使用される「陰府」という言葉は、神の御手が届かない死の世界のイメージであり、詩人が自分の直面している現実には神の助けを感じることでできない絶望を感じていることが痛く伝わってきます。「**力のない者**」とは、神の助けを得ることのできない陰府の住人の姿。「**見放され**」（5 節）の原義は「自由にする」ですが、ここでは「神に見放される」という意味で言われているでしょう。「**覚えてはおられません**」「**御手から断ち切られています**」（5 節）と、いよいよ絶望的です。

詩人にとって、自分の苦しみの原因は理解できぬものでした。まさか、神の怒りが自分に向けられているのか（7 節）。旧約では因果応報的な思想が依然として生き残っていましたので、自分の苦悩を何かに結びつけて理解しなくては説明がつかなかったのでしょう。

本篇に何度か登場する「友」の存在は、どこかヨブ記を思わせます。「**あなたは私の親友を私から遠ざけ、私を彼らの忌みきらう者とされました**」（8 節）、「**あなたは私から愛する者や友を遠ざけてしまわれました**」（18 節）という表現は、かつて親しくしてくれていた友人たちが詩人から離れていった様子を言い表しているでしょう。「**私は閉じ込められて、出て行くことができません**」（8 節）と

¹ 原文では「**קָרַע**／ツァーク／動詞」「**רִנָּה**／リンナー／名詞」と、異なる語が使われています。

いう状況から、どうもこの詩人はツァラアトに雇っていたのではないかと想像することができます。レビ記 13 章の規定にあるように、この皮膚病に罹った人は「汚れている」と宣言され、民から隔離されました。今でこそ病人に対する理解が深まり差別視は減ってきていますが、この時代は「何らかの罪の結果このような仕打ちに遭っている」という見方がなされ、この冷ややかな視線はより一層病人を苦しめるものとなりました。ヨブの三人の友人は、章を追うごとにヨブにどうにか罪を認めさせようと語気を強めていきます。本篇の詩人も、友にさえ棄てられるという悲しみを経験していたのです。

多くの詩篇では苦しみの訴えの後に大抵希望の光が射し込みますが、本篇ではそうではありません。締めくくりとなる 13～15 節も、相変わらず暗い影が落ちているのです。「たましいを拒み」「御顔を隠される」(14 節)、「死に瀕し」「恐ろしさに耐え」「心が乱れ」(15 節)、「あなたの燃える怒りが私の上を越え」「あなたからの恐怖が私を滅ぼし尽くし」(16 節)、「これらが日夜、大水のように私を囲み、私を全く取り巻いてしまい」(17 節)と、どこまで闇は深まるのでしょうか。最後の「私の知人たちは暗い所にいます」(18 節)は、直訳すると「我々の知人たちは暗闇」であり、詩人の友は闇だけになったことを言い表しているようです。こんなふうにして本篇は終わってしまうのです。

さて、このような暗黒の詩篇から、読者は何を読み取ることができるのでしょうか。唯一「光」らしきものが見えるのは 13 節です。「朝明けに、私の祈りはあなたのところに届きます」と、来る朝ごとに「もしかしたら神の助けが来るかもしれない」と微かな希望を抱く詩人の心根が見られます。この詩人から大いに学ぶべきことがあります。それは、どれほど現実には暗かったとしても、尚も神を呼び求め続ける姿勢です。この姿勢は、すべてを失ったときにも神を賛美したヨブの信仰を思わせます(ヨブ 1:21)。ヨブは全身を悪性の腫物で打たれたときにも、神が決定されたのであれば我が身に降りかかる災いをも受け入れなくてはならないという信仰を表明しています(2:10)。更に、彼はそれほどの境遇に置かれても、自分の生まれた日を呪うことで、神を呪うことを避けた(3:1)。聖書には多くの「苦しみの人」が登場しますが、「下には下が」います。私たちが知りうる苦難の頂点は、やはり十字架上の主イエスの姿を置いてほかにないでしょう。父と子の永遠の愛の関係が絶たれた時であり、主は肉体的な苦痛の絶頂とともに、誰も経験したことのない孤独の極みを味わわれました。棄てられるはずのない方によって棄てられたのです。しかし、その時に主が登せられたことばは、自分をお救いにならない神を尚も信頼する信仰の叫びでした。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ 27:46)。主イエスは苦しみと孤独の只中で、自分のすべてを神の御手に委ねたのです。

詩篇 88 篇のような「光の见えない詩」からも、読者は慰めを得ることができます。それは、希望の见えない人生を歩んでいる人にとっては尚更のことでしょう。「それでも神はおられる」「苦しむ私の祈りを聞いておられる」と信じて、自分の思いを赤裸々に表現することができるのです。そのような祈りのモデルとして、本篇を私たちの心に保存したいと思います。